

History of Esthetic Education

エステティック教育の歩み

ここからは、エステティック教育の歴史を見ていきたい。エステティックの目的は「心身の美と健康」。エステティックを受けることで、コンプレックスが解消され心も明るく晴れやかになる、つまり心と体の美しさがエステティックが目指すところだ。日本には存在しなかったエステティックを海外からいかに学んでいったのか調査した。

HISTORY

19世紀初頭	ヨーロッパでエステティックが誕生
1905年	芝山みよか氏の父・兼太郎と、初代・遠藤波津子氏がそれぞれ美顔術を提供(日本初)
1946年	CIDESCO設立(エステの教育機関で世界水準のエステティシャンを育成)
1951年	芝山みよか氏がフランスにエステティック留学
1970年	第24回CIDESCO国際会議に芝山みよか氏が出席し、CIDESCO日本支部の許可を受ける
1972年	「日本エステティシャン協会(CIDESCO日本支部)」発足(現・日本エステティック協会)
1973年	滝川(株)が社内に「タキガワ エステティックスクール」を開講、1975年に教育機関に
1974年	日本エステティシャン協会が講習会を開催
1981年	滝川(株)が中国の要請を受け、中国でエステティックのデモンストレーションを行う
1985年	日本エステティシャン協会が「エステティック専門講座テキスト」(全10巻)を発刊
1986年	日本エステティシャン協会が通信教育を開始(現在は各認定校により実施)

学ぶことから始まった日本のエステティック

「心身の美と健康」というエステティック概念を最初に提唱したのは、ヘレナ・ルビンスタイン氏。1902年にオーストラリアのメルボルンで開いたサロンが、現在の原型といわれており、お客様ひとりひとりの肌に合わせた化粧品でトリートメントを行っていたという。

一方、そのころ日本では1905年に美容室から美顔術が始まる。芝山兼太郎氏もそのひとりで、自らつくった教科書を用いて全国をめぐる技術普及に努めていた。兼太郎の娘で、普及活動にも同行していた芝山みよか氏の存在も大きい。彼女は、敗戦後の日本でGHQに直談判し、1951年に渡仏。ヘレナ・ルビンスタイン氏のもとでエステティックを学び、のちにサロンを開業する。日本の現代エステティックへの一歩を切り拓いた人物といえる。

こうして、個人レベルからスタートしたエステティック教育だが、「日本エステティック協会(当時は日本エステティシャン協会)」が設立したことで大きく変化する。1972年、エステティシャンの職能団体として誕生すると、講習会の開催や技術テキストの編纂など、教育システムの構築を次々と行っていたのだ。

企業からのバックアップがあったのもこの時期。美容の商社、滝川(株)では、1972年にヨーロッパを視察しカリキュラムを組みあげ、1973年に「タキガワ エステティックスクール」を社内に開校する。教育需要の高さから1975年に新宿校も開設し、日本初となる本格的なエステティックスクールから多くのエステティシャンを輩出したという。

HISTORY

1990年	滝川(株)が日本初となる大規模なエステイベント「タキガワ エステティックフォーラム'90」を開催 日本エステティシャン協会認定校が30校に
1994年	日本エステティシャン協会の認定エステティシャン資格制度がスタート
2000年	日本で初の「CIDESCO認定校」が認可
2001年	日本エステティシャン協会を「日本エステティック協会」に改称
2007年	技能五輪国際大会へ日本がエステティック部門に初参加 日本産業分類において「エステティック業」が産業として定義・分類される
2013年	日本エステティック研究財団が「エステティックの衛生基準」をeラーニングにて開始
2016年	日本エステティック協会が一般向けに『美肌検定®』の教科書®を発刊し「美肌検定®」を開始
2018年	厚生労働省「職業能力評価制度」の評価基準に「エステティック業」が加えられる 日本エステティック協会が会員向けにeラーニング講座「AJESTHE eアカデミー」を開始
2019年	日本エステティック協会がエステティックの歴史をまとめた『美しくありたい。私たちの時代だから』を発刊

エステティックの役割が増え、教育も多岐に

日本エステティック協会(以下・協会)が設立したことで、「エステティック」という言葉が消費者まで浸透した80年代。バブル景気に乗って産業規模も成長していくと、教育の形も変化していく。

1986年、協会は通信教育を開始し、既存の美容従事者たちにも学ぶ機会を提供する。また、技術水準と消費者の安全確保から、資格制度と認定校制度を整備していき、1990年に認定は30校に、1994年認定エステティシャン資格制度が開始され、技術者教育と教育者環境の双方の健全化を図っていったのだ。

バブル景気に沸き90年代になると、ストレス社会からエステティックへの癒やし需要も大きな役割となり、エステティシャンはより総合的な応対が求められるように。1990年、滝川(株)ではこうしたニーズに応えるため大規模イベント「タキガワ エステティックフォーラム'90」を開催し、各分野の第一人者が講演を行った。

エステティック産業が拡大していくなかでは、行政から広告表示の適正化や特定商取引法遵守を求められ、その都度、協会が業界を先導してきた側面もある。その結果、健全な発展が認められ2007年に「エステティック業」が日本産業分類に加わり、2018年に厚生労働省による「職業能力評価基準」にエステティック業が設けられるまでに。

教育を主軸に成長してきたエステティシャンたち。2007年から参加した技能五輪国際大会では、メダルが期待される種目へと近年は成長している。

1951

仏にエステ留学した芝山みよか氏

日本に美顔術を普及させた芝山兼太郎氏を父に持つ芝山みよか氏は、戦後の日本女性をきれいにしたいと、1951年フランスへ留学。ヘレナ・ルビンスタインに師事し、インターナショナルエステティックアカデミーでエステティックを学ぶ。生理学にも精通し、エステティシャンとして学ぶ大切さを伝えてきたひとり。



芝山みよか氏

写真提供/シバヤマ美容室

1972

日本エステティック協会が設立

日本のエステティックを語るうえで欠かせない存在が、1972年に設立した「日本エステティシャン協会」、現在の「一般社団法人日本エステティック協会(久米健理事長)」だ。その設立背景には、1969年にCIDESCO国際会議に参加した2人の日本人の存在がある。医師の山本茂一氏とカネボウ化粧品美容研究所の吉田醇氏は、エステティックの価値とその将来性を確信し、帰国後、最新のエステ技術を提供していた芝山みよか氏に相談。1970年にCIDESCO日本支部の許可を取ると1972年の発足となった。協会がまず着手したのは講習会。美容、理容、化粧品、医学など、各分野のエキスパートたちが講師を務め、同時に知識の共有と研究を行いながら、統一概念を構築していったのだ。



協会設立45周年を記念し発刊された『美しくありたい。私たちの時代だから』(マガジンハウス)。

1990

「タキガワ エステティックフォーラム'90」で2,000名が受講

1990年3月12日(月)、13日(火)、滝川(株)が主催の「タキガワ エステティックフォーラム'90」が行われた。エステティックでは日本で初の大規模イベントで、フォーラムの目玉は、各分野の第一人者による講演会。芝山みよか氏をはじめ、ネイルのジェシカ女史、料理家のパラバ寺岡氏のほか、タラソテラピーやカウンセリング術、ストレス学などが披露され、2日間で約2,000名が受講をしたという。会場には、最新美容機器や手技、化粧品なども並び、体験会も行われた。



2016

「美肌検定®」で消費者へ訴求

一般消費者に向け、美肌に関する知識の普及を目的に、協会から『美肌検定®の教科書®』を発行し、「美肌検定®」を実施している。



『美肌検定®の教科書®』美肌のための正しい知識が詰まった1冊。巻末には想定問題があり美肌検定®対策も。

1972~1973

「タキガワ エステティックスクール」が開校

日本のエステティック産業の草創期、教育面からサポートしたのが滝川(株)だ。スクール開校準備として、1972年にヨーロッパを視察し、ロンドン、西ドイツ、イタリア、パリのサロンやスクール、メーカーなどを巡る。翌年、イタリア政府公認のインターナショナル エステティックスクールで教員研修を行い、最新情報と知識、技術をもって、社内に「タキガワ エステティックスクール」を開校。需要の高さから、1975年新宿校、1977年名古屋校、1982年大阪校を開校する。同社は開校後も情報収集を行っているのが特徴で、1977年に、アメリカで「エステの母」といわれるクリスティン・バルミー女史の会社と業務提携し、教員の研修をするなど、教育の質も上げていった。



ポーランドのエステサロン視察。

1984

中国からの要請でデモンストレーション開催

滝川(株)が「タキガワ エステティックスクール」開校後、エステティック技術についてアジアから問い合わせがくるように。1984年、滝川(株)は中国からの要請を受け、北京市内でエステティックのデモンストレーションを行った。北京市の副市長や要人も参加し、デモの様子は中国各地にTV放映されたという。昨今は、アジアからのエステティック教育需要が盛んだが、日本の教育が80年代から注目されていたことが伺える。



4日間に渡り行われたデモンストレーション。写真は北京市内の美容室で、前列左から中国の要人、通訳、滝川和秀氏。

2018

eラーニング導入で学ぶ環境も整備

近年の教育環境の特徴として、時間に縛られず受講できるeラーニングが挙げられる。2013年に公益財団法人日本エステティック研究財団(関東裕美理事長)は、「エステティックの衛生基準」の知識習得にeラーニングを採用(詳細はP15)。日本エステティック協会では、2018年に会員向けに「AJESTHE eアカデミー」を開校し、コンプライアンス講座や動画などを配信している。

2018

「職業能力評価基準」

「職業能力評価基準」は、厚生労働省が整備を進めている各職業の基準指標。2018年に「職業能力評価基準」にエステティック業が加わったが、その2年前から、日本エステティック協会の久米健理事長が包括的職業能力評価制度準備委員会の座長を務め、整備を行ってきた。「職業能力評価基準」には、エステティックの仕事に必要な「知識」「技術」に加え「成果につながる職務行動例」が整理されている。この基準を活用することで、サロンスタッフの業務レベルを公平に評価でき、キャリアアップの指標と透明性も確保できる。2018年の弊紙インタビューで久米理事長は職業能力評価基準について「エステティック業界の人材確保・定着・育成につながる第一歩」とコメント。労働生産性の向上が課題の昨今、「人材の確保・定着・育成」は不可欠とし活用を促した。「職業能力評価基準」については、厚生労働省 人材開発統括官 能力評価担当参事官室へ、TEL:03-5253-1111(内線:5880)9:30~18:15。



活用マニュアルは厚生労働省のサイトからダウンロードが可能。